

こんなに大きくなったよ

小学校・2～3年生

I プログラムについて

1 人権教育上のねらい（普遍的な人権課題「生命尊重」）

＝【人権感覚育成のための視点】

出生時と比べてどのくらい成長しているかを実感することや、ゲストティーチャー等から出生前の様子や成長に関わる方の思いを聞くことで、自他の生命を尊重することができるようにする。

2 関連する教科等について

○学級活動

内容（2） 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全
（イ よりよい人間関係の形成）

3 人権教育上の視点

- （1）自分及び他者の成長や命の温かみを知ること、自他の生命を尊重しようとする。（価値・態度）
- （2）成長に関わった方の気持ちを想像したり、考えたりすることができる。（技能）

II アクティビティーについて

1 概要

○活動1

現在と出生時の一般的な身長と体重を比べることで、自分がどのくらい成長をしてきたのかを知る。

○活動2

出生前やお腹の中でどのように成長してきたかを知る活動や心臓の音を聴く活動を通して、命の温かさに気付く。

○活動3

ゲストティーチャー等から話を聞き、命の大切さについて考え、自他の生命を尊重しようとする。

2 準備するもの

- 事前アンケート
- 事前アンケート結果
- ワークシート
- 出生時と現在の身長それぞれの平均の長さに切った紙テープ
- 赤ちゃんの人形
- ピンで穴をあけた画用紙
- 聴診器

3 アクティビティーの進め方

- 活動1 「出生時と現在の身長・体重の比較」
 - ① 出生時の一般的な身長と学級の平均身長を紙テープの長さで比較し、どのくらい成長しているのかに気付く。
 - ② 赤ちゃんの人形を抱いて、赤ちゃんだったころの自分の重さを体感し、成長していることに気付く。
- 活動2 「出産前の様子の確認」
 - ① ピンで穴をあけた画用紙を見て、そこから現在の自分に成長したことを知る。
 - ② どのくらいの期間、お腹の中にいたのかを知る。
 - ③ 生まれる直前、赤ちゃんはどのような格好でいたのかを知る。
- 活動3 「心臓の鼓動を体感」
 - ① 自分や友達の子心臓の鼓動を感じることで命の温かみを知る。
- 活動4 「振り返り」
 - ① 活動を振り返り、感じたことや思ったことを交流する。

4 アクティビティーを指導する際のポイント

- 母子、父子家庭や里親など家庭環境や生育歴が複雑な児童への配慮を欠かさない。あくまでも一般的な成長について触れるようにする。
- 成長には個人差があることを指導し、成長度の競い合いにならないようにする。
- 養護教諭、助産師等をゲストティーチャーとして招くとより効果的である。
- ゲストティーチャーを招く場合、以下のような事前打ち合わせを行う。
 - <ゲストティーチャーに話してほしい内容等>
 - ・赤ちゃんのもと（卵子）の大きさ（ピンで穴をあけた画用紙を提示）
 - ・生まれてくるまでの期間
 - ・お腹の中にいる様子

- ・心臓が動いている様子
 - ・成長に関わった方々の思いや気持ち
- <配慮してほしい内容>
- ・活動2における出生前の話では、詳しく話すことはせず、誰もが赤ちゃんのもと(卵子)から同じような過程で成長しているということを伝える。

III 授業の実際

時間	学習活動 発問 (T1:担任、T2:ゲストティーチャー) 児童の反応例 (C)	教師の働きかけ (・) 人権教育上の配慮 (◎)
10分	1 事前アンケートの結果の提示 T1 小さい頃と比べると、できるようになったことが増えましたね。みなさんは、どのように成長してきたのでしょうか。 C 覚えていないよ。 C 考えたことがなかった。	・事前アンケートの結果を提示することで、自分の成長に関心をもてるようにする。
	どのように大きくなってきたのかを調べてみよう	
	2 出生時と現在の身長体重のそれぞれの平均の比較 T1 生まれた時の身長と今の身長の違いはどのくらいあるのかな。 C 40cm ぐらい。 T1 生まれたばかりの身長の平均は、50cm です。3年生の身長の平均は、130 cm です。違いはどのくらいかな。 C 80cm ぐらい。 T1 生まれた時と今の体重を比べてみましょう。 C ずいぶん重くなったなあ。 C 赤ちゃんって重いんだな。小さくてかわいいな。 T1 生まれた時と今の身長体重の平均を比べて感じたり考えたりしたことを書きましょう。 C こんなに成長していることに驚いた。	・発育には個人差があることを伝え、成長度合いの競い合いにならないようにする。 ・出生時と現在の身長の違いが分かりやすいよう、それぞれの身長の平均を紙テープの長さで示す。 ・赤ちゃんの人形を抱くことで、出生時の重さを実感できるようにする。 ◎自分だけではなく、他者も同様に大切な存在であることを児童に気付かせるために、友達の身長や体重の成長にも目を向けるように促す。(価値・態度)

	<p>C 自分だけでなく、友達も同じように成長しているんだな。</p>	
<p>20分</p>	<p>3 出産前の様子の確認 T2 赤ちゃんのもとは、どのくらいの大きさかな。 C 野球のボールぐらい。 T2 赤ちゃんのもとは、この大きさです。(ピンで穴をあけた画用紙を見せる。) T2 赤ちゃんのもとから、赤ちゃんになるまで、どのくらいお母さんのお腹の中にいるのかな。 T2 10か月の間、お腹の中で生活しています。 C すごい。 T2 生まれる直前、赤ちゃんはどんな格好でいたのかな。 C 横になっている。</p> <p>4 自他の心臓の鼓動を体感 T2 ずっと止まらずに動いているものがあります。何でしょうか。 C 心臓かな。 T2 心臓はどう動いているのかな。 C ドクドクしている。すごい。 T2 みんなの心臓はどんな音がするのかな。聞いてみましょう。 C ドクドクしている。 T2 自分の心臓の音を聞くことができたなら、隣の友達の手を握り、心臓の音も聞いてみよう。 C 同じ音がする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲストティーチャーとして養護教諭や助産師に出生前のことを話してもらおう。 ・全員にピンで穴をあけた画用紙を配布し、赤ちゃんのもとの大きさを確認できるようにする。 ・自分だけでなく友達も同じように10か月の間、大切に育てられていることに気付かせる。 ・実際にお腹の中にいる様子を画像で見せる。 ・心臓が実際に動いている様子を動画で見せる。 ・聴診器があれば、聴診器で心臓の鼓動を聞かせる。 <p>◎自他の成長や命の温かみを感じられるようにするために、自分や他者の心臓の鼓動を聞いてみるように促す。(価値・態度)</p>
<p>15分</p>	<p>5 振り返り T1 このように生まれ、成長してきたみなさんのことを周りの人たちはどのように思っているのでしょうか。代表でゲストティーチャーにお手紙を読んでもらいます。聞いてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・他の児童も自らと同じように大切に育てられたことに触れて、命の大切さも考えさせる。

<p>T1 今日学習したことについて、気付いたことや考えたことを書きましよう。</p> <p>C 生まれて生きていることがすごいと感じました。たくさんの人に守られていることが分かりました。</p> <p>C 自分だけでなく、友達も同じようにたくさんの人に守られていることが分かったので、自分も友達も大切にしていきたい。</p>	<p>◎自分の周囲の人たちの存在の大きさについて言及できている感想を取り上げて紹介したり、周囲の人たちの支えにも目を向けられるように助言をしたりする。 (技能)</p>
---	--

IV 資料

(1) 事前アンケート

アンケート

() 年 () 組 名前 ()

小さなころとくらべて、どんなことができるようになりましたか。

(れい) ・わたしは、〇〇のおてつだいができるようになった。

・わたしは、かん字をたくさんかけるようになった。

・わたしは、〇〇が苦手だったけれど、最後までかんばれるようになった。

・わたしは、
・わたしは、
・わたしは、
・わたしは、
・わたしは、

(2) ワークシート

こんなに大きくなったよ

()年()組 名前()

- 生まれた時と、今のしん長・体じゅうをくらべて、気づいたことを書きましょう。

- 今日の学習で「いのち」について気づいたことや、考えたことを書きましょう。

「命」とつながりのある食材は どれだろうか？

小学校・4～6年生

I プログラムについて

1 人権教育上のねらい（普遍的な人権課題「生命尊重」）

＝【人権感覚育成のための視点】

食材を三色食品群に分類する活動を通して、食材を「食べる」ことにより、私たちの命は支えられていることを理解するとともに、私たちの命を支えている食材に感謝することができる。

2 関連する教科等について

○学級活動

内容（2） 日常生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全

（エ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成）

3 人権教育上の視点

（1）私たちの命は、多くの食材により支えられていることを理解する。
（知識）

（2）食材に感謝し、自他の命を大切にしようとする。（価値・態度）

II アクティビティーについて

1 概要

○活動1

給食の献立表をもとに、食材を三色食品群に分ける。

○活動2

食材の栄養素の働きについて話し合う。

○活動3

本時の学習を振り返り、「食材」と「命」について考える。

2 準備するもの

- 好きな給食の献立ランキング（掲示用）
- 献立表
- 献立の写真
- ワークシート
- 短冊状に切った厚紙

3 アクティビティーの進め方

- 活動1 「調べ学習」
 - ① 給食の献立表をもとに、食材をワークシートに書き出す。
 - ② 書き出した食材を三色食品群に分類する。
 - ③ 献立には、三色食品群に属する食材がまんべんなく用いられていることを理解する。
- 活動2 「話し合い」
 - ① ワークシートをもとに話し合う。
 - ② 食品群に偏りのある食生活を送った場合、私たちはどうなるのかを話し合う。
 - ③ たくさんの食材をバランスよく食べることで、私たちは健康に生きていくことができることを理解する。
- 活動3 「振り返り」
 - ① 「食べる」ことは、私たちの命を支えるための行為であり、私たちの命を繋いでいる行為であることを理解する。
 - ② 命を感じるために、自分の脈に触れたり、心臓に手を当てたりするなどの活動を行う。

4 アクティビティーを指導する際のポイント

- 授業は食育の観点であるが、生命を尊重する人権感覚を高めることが最大のねらいであることを理解した上で、指導にあたる。
- 活動1の「調べ学習」では、三色食品群全てに食材を記入できるよう指導する。
- 食物アレルギーの児童や宗教上の理由で特定の食材を食べることのできない児童などを考慮し、複数の献立表を用意するなど、活動の幅が広がるよう配慮する。
- 家庭科「B 衣食住の生活（3）栄養を考えた食事」や、全国学校給食週間（1月24日から1月30日）に行うと効果的である。

III 授業の実際

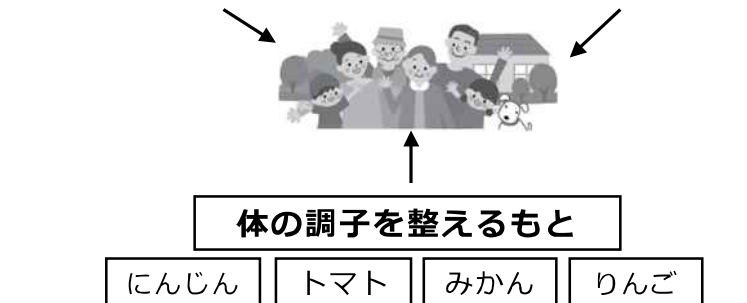
時間	学習活動 発問 (T) 児童の反応例 (C)	教師の働きかけ (・) 人権教育上の配慮 (◎)
10分	<p>1 アイスブレイキング「クラスの好きな給食の献立ランキング」</p> <p>T このクラスの好きな給食の献立ランキングです。当ててみてください。</p> <p>C 全部当てるのは難しい。</p> <p>C 上位はお肉の献立が多い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ルールの説明を簡単に行う。 ・ 児童が発言・発表しやすい雰囲気をつくる。 ・ 献立の食材は何かを問うことで、本時の活動へとつなげていく。
25分	<p>2 学習内容 (手順) の確認</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">「命」とつながりのある食材をさがそう</div> <p>3 グループによる調べ活動</p> <p>T 献立表を見て、献立ごとにどんな食材が使われているのか調べましょう。</p> <p>C いろいろな食材が使われているね。</p> <p>C 調理されると食材の味や形が分からなくなるものもあるね。</p> <p>T 書き出した食材を三色食品群に分けてみましょう。</p> <p>4 発表</p> <p>T 食材を三色食品群に分けた結果を発表してください。</p> <p>T 食材を三色食品群に分けてみて、どんなことが分かりましたか。</p> <p>C どの献立にも、三色食品群の食材が使われているね。</p> <p>C どの食品群にも同じくらいの数の食材が使われているね。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習の流れの説明をする。 ・ グループをつくり、献立表とワークシートを配布する。 ・ 献立に使用している食材を分かりやすくするために、献立の写真を提示する。 ・ 三色食品群について、説明する。 ・ 使用する献立表が、食材を三色食品群に分けている場合は、献立表を活用して食材を分類する。そうでない場合は、参考資料を児童に提示して、食材を分類するよう指示する。 ・ ワークシートに書ききれない場合は、枠を増やすなどして記入するよう伝える。 <p>◎ 命のつながりを理解させるために、食材が何からできていて、自分の体のどの部分になるのかを板書する。(知識)</p>

	<p>5 意見交換</p> <p>T もし、三色食品群の食材のうち、一つの色の食材しか食べなかった場合、私たちはどうなってしまおうでしょうか。</p> <p>C 栄養が偏ってしまう。</p> <p>C 栄養が偏ることで、体調が崩れてしまいかもしれない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 例えば○色の食材がなかったら、何が不足するのか、体にどんな影響があると思うかなど、具体的に発問する。 • 三つの食品群のバランスが保たれていることで私たちは健康に生きていられることをおさえる。
<p>10分</p>	<p>6 振り返り</p> <p>T 今日の活動を通して気付いたことは何ですか。</p> <p>C 食材をきちんと食べることで、私たちの体は作られている。</p> <p>C 食材を食べることで、私たちは生きていくことができるんだ。</p> <p>T 一つの食材だけでは、私たちは生きていくことが難しいですね。</p> <p>C たくさんの種類の食材によって自分の命が支えられているんだね。</p> <p>T 今日の学習を通して、命についてどんなことを考えましたか。</p> <p>C 食材に感謝し、支えてもらった自分の命を大切にしたい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 本時の学習を振り返り、食材と命について考えさせる。 <p>◎生きている実感をもたせるために、脈に触れたり、心臓に手を当てたりする活動を取り入れる。 (価値・態度)</p> <ul style="list-style-type: none"> • ワークシートに本時の学習の振り返りを記入させる。

IV 資料

(1) 板書例

「命」とつながりのある食材をさがそう

<p>クラスの好きな給食の こん立ランキング</p>	<p>体をつくるもと</p> <table border="1"> <tr> <td>ぶた肉</td> <td>牛肉</td> </tr> <tr> <td>とり肉</td> <td>チーズ</td> </tr> </table>	ぶた肉	牛肉	とり肉	チーズ	<p>エネルギーのもと</p> <table border="1"> <tr> <td>米</td> <td>うどん</td> </tr> <tr> <td colspan="2">じゃがいも</td> </tr> </table>	米	うどん	じゃがいも	
ぶた肉	牛肉									
とり肉	チーズ									
米	うどん									
じゃがいも										
<p>三色食品群の説明</p>	 <p>体の調子を整えるもと</p> <table border="1"> <tr> <td>にんじん</td> <td>トマト</td> <td>みかん</td> <td>りんご</td> </tr> </table>		にんじん	トマト	みかん	りんご				
にんじん	トマト	みかん	りんご							

(2) ワークシート

私たちの命を支える食材調べ

年 組 氏名 _____

1 こん立に使われている食材と食品群を調べましょう。

NO	こん立名	食材	食品群の色
	例) カレー	じゃがいも	黄色
		にんじん	緑色
		たまねぎ	緑色
		油	黄色
		ぶた肉	赤色
1			
2			
3			
4			
5			

2 食材を食品群ごとにまとめましょう。

赤 体をつくるもとになる	黄 エネルギーのもとになる	緑 体の調子を整えるもとになる

○三色食品群

赤	体をつくるもとになる	肉、魚、牛乳、乳せい品、豆など
黄	エネルギーのもとになる	米、パン、めん類、いも類、油、砂糖など
緑	体の調子を整えるもとになる	野菜、果物、きのこ類など

3 今日の学習をとおして、命についてどんなことを考えましたか。

V 出典・参考資料

- 農林水産省 Web サイト
(http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/zissen_navi/balance/guide.html)

あなたは何を持って行きますか？

中学校・2～3年生

I プログラムについて

1 人権教育上のねらい（普遍的な人権課題「生命尊重」）

＝【人権感覚育成のための視点】

震災時の避難の際に、それぞれの家族に合った非常持ち出し品を選ぶ活動を通して、自他の生命を尊重するとともに、互いに支え合って生きていることを理解し、生命への畏敬の念をもつことができるようにする。

◇関連する個別の人権課題「災害時における人権への配慮」

2 関連する教科等について

○学級活動

内容（2） 日常の生活や学習への適応と自己の成長及び健康安全
（エ 心身ともに健康と安全な生活態度や習慣の形成）

3 人権教育上の視点

（1） 生命の尊さを理解し、自らの命を大切にするとともに、他者の生命も尊重することができる。（価値・態度）

II アクティビティーについて

1 概要

○活動1

各自が、地震等の震災を想定し、リストの中から非常持ち出し品を選ぶ活動を行う。

○活動2

自分の考えをもとにグループで話し合い、グループとしての考えをまとめる活動に取り組む。話し合いを通して、気付いたことや感じたことを話し合う。また、自分のこれからの生き方について考える。

2 準備するもの

○ワークシート

○非常持ち出し品リスト

○振り返りシート

3 アクティビティーの進め方

- 活動1 「あなたは何を持って行きますか？」
 - ① 本時の活動における状況の説明を聞く。
 - ② 個人（自分の考え）で、非常持ち出し品を選ぶ活動に取り組む。

- 活動2 「話し合い」
 - ① 個人の考えをもとに、グループで意見交換をし、グループとしての考えをまとめる。
 - ② グループごとに自分たちの考え（選んだ理由等）を発表する。
 - ・一人一人の考えを尊重することを踏まえる。

- 活動3 「振り返り」
 - ① 活動を通して、気付いたことや考えを振り返る。
 - ・他者の考えに対する理解を深める。
 - ・人権の大切さについて考えを深める。
 - ・今後の生かし方について考える。

4 アクティビティーを指導する際のポイント

- 非常持ち出し品を選ぶ活動は、選ぶことだけが目的ではなく、生命の尊さを考え、人は互いに支え合って生きていることを理解させることが最大のねらいであることを意識して指導にあたる。
- 非常持ち出し品リストを十分確認し、時間をかけてよく考えてから選ぶ活動に入るよう指導する。
- 家族構成は、クラス・生徒の実態等によりA～Gを選択して、割り振る。

- | | |
|---|--|
| A | 父親、母親（重い病で寝たきり）、子2人（中学生、高校生）、祖母（70歳代）の5人家族 |
| B | 父親（足に障害があり車椅子を使用）、母親、子2人（小学生、中学生）の4人家族 |
| C | 両親、子2人（生後3～6か月の乳児、3～4歳の幼児）の4人家族 |
| D | 両親、子2人（小学生、中学生） ※ 父親が遠隔地に単身赴任中 |
| E | 70歳代の老夫婦のみの家族 |
| F | 両親、子2人（中学生、大学生）
※全員外国籍で、母親は日本語が十分話せない。大学生の子は遠隔地で下宿中 |
| G | 祖父・祖母・父・母・子3人のうち4～6人を選択 |

- グループでの話し合い活動を通して、生徒相互の人権についての意識の高まりを効果的に引き出せるよう、助言・支援する。
- 例えば防災週間（8月30日～9月5日）や避難訓練の時期に合わせて実践すると効果的である。

Ⅲ 授業の実際

時間	学習活動 発問 (T) 生徒の反応例 (S)	教師の働きかけ (・) 人権教育上の配慮 (◎)
10分	1 本時の活動内容の確認 2 状況の確認	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動について説明する。 ・グループ学習ができるように準備する。(3～4人構成) ・ワークシートを配布し、状況について説明する。 ・グループごとに家族構成を割り振る。
25分	3 個人での非常持ち出し品の選定 T まずは個人で、家族に必要な非常持ち出し品を選んでください。 S 食べ物・飲み物。 4 グループによる話し合い活動 T グループで話し合い、今度はグループとして非常持ち出し品を決めてください。 S コレクションは持っていきたいけど、仕方ない。 S 10kg以内にするのは難しい。	<ul style="list-style-type: none"> ・選ぶ活動に終始せず、選んだ理由を説明できるように促す。 ・グループとしての意見をまとめる際に、選んだ理由だけでなく、持って行きたいが持って行けないものや離れて暮らす家族についても考えられるよう助言・支援する。 ◎一人一人の生命の大切さに気付けるように、家族それぞれに応じて必要な非常持ち出し品を考えるように指示する。(価値・態度) ・非常持ち出し品を選んだ理由等を明確にして説明するよう促す。
15分	6 振り返り T 本時の学習を通して気付いたことや感じたことを話し合いたしましょう。 T 本時のまとめを振り返りシートに記入してください。 S 大事なものはたくさんあったが、家族一人一人のこともしっかり考えないといけない。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習について、グループで話し合うよう指示する。 ・リストにあったペットの生命も大切であり、どうすればペットの生命を大事にできるかという視点も大切であることに触れる。

IV 資料

(1) ワークシート

あなたは何を持って行きますか？

() 年 () 組 氏名 ()

状況

本日、22時に震度6の地震が発生。幸いにも家族は無事でしたが、家は半壊し、このままとどまるのは危険な状態です。避難所へ向けたバスがあと30分で出発します。避難所のスペースの関係で、持ち込める荷物は一家族10kg入りバッグ一つと決められています。あなた(の家族)は何を持って行きますか？

非常持ち出し品 記入用

家族名	個人に必要なもの・理由	家族に必要なもの・理由
重さ 小計	A kg	B kg
重さ 合計	A+B kg	

(2) 非常持ち出し品リスト

非常持ち出し品リスト		※ 1 品目は全て 1 人分	
① 犬や猫などのペット	5 kg	⑰ 携帯用テレビ	1 kg
② パソコン	2 kg	⑱ ハンカチ・タオル・靴下・スカーフ・手袋など	0. 5 kg
③ 救急医薬品	0. 5 kg	⑲ 常備薬	0. 1 kg
④ 預金通帳・クレジットカード	0. 1 kg	⑳ CD・ビデオ・DVD	0. 5 kg
⑤ パスポート	0. 1 kg	㉑ 愛読書・仕事に必要な図書	1 kg
⑥ 生徒手帳・学生証	0. 1 kg	㉒ 筆記用具	0. 1 kg
⑦ 携帯用ラジオ	0. 2 kg	㉓ 家族のアルバム	1 kg
⑧ 着替え・下着・オムツ類	0. 8 kg	㉔ キャンプ用調理器具・はし・スプーンなど	2 kg
⑨ 先祖の位牌	0. 5 kg	㉕ 防寒具	2 kg
⑩ おにぎり・お弁当・ミルクなど	0. 2 kg	㉖ コレクション・愛用品など	1 kg
⑪ お気に入りの服・着物	2. 5 kg	㉗ 不動産の登記証書	0. 1 kg
⑫ デジタルカメラ	0. 3 kg	㉘ 時計	0. 1 kg
⑬ 印鑑・印鑑証明カード	0. 1 kg	㉙ 携帯電話・スマートフォン	0. 2 kg
⑭ 自動車運転免許	0. 1 kg	⑳ 保存食品 (ハム・梅干し・昆布など)	0. 5 kg
⑮ 水 (ペットボトル 1. 5 L 1本)	1. 5 kg	㉑ 貴金属・宝石など	1 kg
⑯ 化粧品	0. 8 kg	㉒ サバイバルナイフ	0. 2 kg

※ 必要に応じてリストの品を増減してもよい。

(3) 振り返りシート

「あなたは何を持って行きますか？」振り返り用紙

()年()組 氏名()

- 1 非常持ち出し品を選ぶ活動を行って、次のことを書きましょう。
 - (1) 気付いたことや感じたこと。

 - (2) グループでの話し合いを通して、分かったことや学んだこと。

- 2 この学習で学んだことを、今後どのように生かしていきたいですか。
(例 今後の生活で気を付けたいことや生かしたいことなど)

脳死と臓器移植について考える

高等学校・1～3年生

I プログラムについて

1 人権教育上のねらい（普遍的な人権課題「生命尊重」）

＝【人権感覚育成のための視点】

脳死や臓器移植に関する資料について話し合う活動を通して、生命の大切さを自覚するとともに、自他の生命を尊重する態度を身に付けることができるようにする。

2 関連する教科等について

○公民

※総合的な学習（探究）の時間での実施も可能

3 人権教育上の視点

（1）生命の大切さを自覚し、かけがえのない自他の生命を尊重しようとする。（価値・態度）

II アクティビティーについて

1 概要

○活動1

3人のグループになり、割り当てられた資料について話し合い、課題について意見をまとめる。

○活動2

新たなグループになり、活動1のグループでまとめた意見をそれぞれ伝え合った上で、テーマを決めて意見交換を行う。

○活動3

グループでまとめた意見の全体発表を聞き、感じたことを個人でまとめる。

2 準備するもの

○学習資料（資料A～資料C）

○ワークシート

3 アクティビティの進め方

○活動1 「学習資料の内容把握」

- ① 3人のグループになり、脳死・臓器提供の基礎知識に関する資料A、臓器提供を選択した家族についての資料B、脳死・臓器提供に慎重な立場からの資料Cの3種類の学習資料のうち、グループごとに別の資料（各グループに1種類）を配る。
- ② 割り当てられた資料の内容について話し合い、与えられた課題についてグループとしての意見をまとめる。

○活動2 「脳死・臓器提供についての話し合い」

- ① 資料A～資料Cに割り当てられたグループから1人ずつ集まるようにして新たなグループを作る。
- ② 活動1のグループでまとめた意見をそれぞれ発表する。また、「話し合いの視点・論点」からテーマを一つ選択し、各自が意見を出し合う。
・グループで意見をまとめるのではなく、個々の意見を聴き合う。

○活動3 「全体発表と振り返り」

- ① グループごとに話し合った内容を全体で発表する。
- ② グループで話し合った内容や全体での発表を踏まえ、個人で感じたことや考えたことなどをまとめる。

4 アクティビティを指導する際のポイント

- 一つの答えを導くことではなく、脳死や臓器移植を題材に、生命の尊さを共感的に感じ取ることをねらいとしていることに留意して実施する。
- ここで扱うのは、臓器移植と臓器提供者への合理的理解までの学習であり、臓器提供者となることを強いて推奨するものではないことに留意する。
- 本人や家族が脳死・臓器提供を実際に受けている生徒がいる場合を想定し、賛成か、反対かではなく、自分や自分の親族が対象となった脳死・臓器提供をするか、しないかを考えさせることで、自分の問題としてとらえさせる。
- 例えば、道徳科・国語科・保健体育科などで生命・医療をテーマとした教材を扱う授業と関連させて実施すると効果的である。

Ⅲ 授業の実際

時間	学習活動		教師の働きかけ（・） 人権教育上の配慮（◎）
	発問（T）	生徒の反応例（S）	
10分	1	本時の学習内容の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本時の学習の説明を行う。 ・ 3人のグループを作らせる。

	<p>2 学習資料の理解</p> <p>T グループ内で話し合いながら、学習資料の内容を理解し、各問いについて他の人に説明できるように意見をまとめましょう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習資料A～C（グループに1種類）、ワークシートを配布する。 ・話し合いが進まないグループには、正解を導き出すのではなく、話し合って意見をまとめることが目的であることを伝えて、活動を活性化させる。
<p>35分</p>	<p>3 新たなグループでの視点・論点を絞った話し合い</p> <p>T 新たに配布された資料を読みましよう。</p> <p>T 先ほどのグループで話し合った各課題についての意見を、グループ内で発表しましょう。</p> <p>S 「臓器移植で命をつなぐ」という言葉があるように、脳死・臓器移植は、ドナーの命が他の人に受け継がれ、大切にされていく医療行為だ。</p> <p>T 「話し合いの視点・論点」からテーマを選び、グループ内で意見交換しましょう。</p> <p>S 脳死状態の患者の家族だったら、脳死と言われても諦められない。</p> <p>S でも、臓器移植で他の人の命が救われる。</p> <p>4 意見の共有化</p> <p>T 各グループ内で話し合った内容を1分程度で発表しましょう。</p> <p>S 「あなたが当事者だったら？」を選んだ。自分がドナーになるかどうかは自分で決めたいが、意思表示をしていなかった親族の臓器提供については決めることができない、という意見が多かった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習資料A、B、Cについて話し合った生徒が1人ずつ入るように、新しいグループを編成させる。 ・全員に3種類の資料が行き渡るように資料A～Cを改めて配布する。 ・資料Aについて話し合った生徒から発表するよう指示することで、脳死・臓器提供についての基礎的な理解を踏まえた話し合いができるようにする。 ・他の意見を肯定的に受け止めながら発言するよう指示することで、相手の考えを共感的に理解しながら聴くことができるようにする。 ・個々の意見を聴き合い、グループ内で合意形成の必要はないことを伝える。 ・発表内容を、選択したテーマごとにまとめて板書することで、次の振り返りで、生徒が考えをまとめやすくする。

5分	<p>5 振り返り</p> <p>T グループで話し合ったことや、全体発表を踏まえ、脳死・臓器移植や生命について考えたことや感じたことをまとめましょう。</p> <p>S 脳死・臓器移植に賛成する人も反対する人も、どちらも生命を尊重していると思う。</p> <p>S もしもの時にドナーになるかどうかを、真剣に考えてみたい。</p>	<p>◎生命の尊さを、その連続性や有限性なども含めて十分理解し、かけがえのない自他の生命を尊重するために、自分や自分の身近な人に置き換えて考えるように助言する。(価値・態度)</p> <p>・振り返りの内容をまとめたものを後日配布するなどして、個人の学びを全体に広げるようにする。</p>
----	--	--

IV 資料

(1) 学習資料

資料A 次の文章を読み、以下のことについて述べられている部分にアンダーラインを引き、他の人に説明できるようにしましょう。

- (1) 脳死とは？
- (2) 臓器移植とは？
- (3) 臓器移植法で出来るようになったことは？

脳死とは、呼吸・循環機能の調節や意識の伝達など、生きていくために必要な働きを司る脳幹を含む、脳全体の機能が失われた状態です。事故や脳卒中などが原因で脳幹が機能しなくなると、回復する可能性はなく二度と元に戻りません。薬剤や人工呼吸器などによってしばらくは心臓を動かし続けることはできますが、やがて（多くは数日以内）心臓も停止してしまいます（心停止までに、長時間を要する例も報告されています）。

植物状態は、脳幹の機能が残っていて、自ら呼吸できる場合が多く、回復する可能性もあります。脳死と植物状態は、根本的に全く違うものなのです。（略）

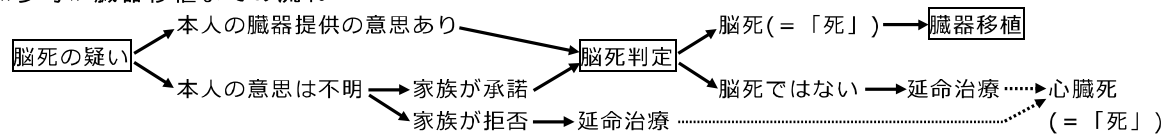
人のからだは、日常生活の中で機能が低下したり、事故や病気で機能を失うことがあります。機能の低下を補うものとして、身近にはめがねや入れ歯などがありますが、臓器が一旦その機能を失うと薬剤や機械で代替することはたいへん難しくなります。臓器移植とは、他の方の健康な心臓、肺、肝臓、腎臓などの臓器を移植して、機能を回復する医療です。健康な家族からの肝臓・腎臓などの部分提供による生体移植と亡くなられた方からの臓器提供による移植があります。（略）

1997年10月16日「臓器移植法」が施行されたことにより、脳死後の心臓、肺、肝臓、腎臓、膵臓、小腸などの提供が可能になりました。しかし、脳死後の臓器提供には、本人の書面による意思表示と家族の承諾を必要としており、この意思表示は民法上の遺言可能年齢に準じて15歳以上を有効としていたため、15歳未満の脳死臓器提供はできませんでした。したがって、小さな臓器が必要なからだの小さな子供たちへの心臓や肺の移植は不可能で、多額の募金を集めて海外に渡航移植をする子供が後を絶ちませんでした。

2010年7月17日に改正臓器移植法が全面施行され、本人の意思が不明な場合には、家族の承諾で臓器が提供できることとなりました。これにより、15歳未満の方からの脳死での臓器提供も可能となりました。また、死後に臓器を提供する意思に併せて親族に優先的に提供できる意思を書面により表示できるとした「親族優先提供」も2010年1月17日に施行されています。

〈(公社)日本臓器移植ネットワーク ホームページより〉

《参考》臓器移植までの流れ



資料B 次の文章を読み、以下のことについて他の人に説明できるようにしましょう。

- (1) この文章を書いた人は、脳死・臓器移植についてどのように考えていると思いますか？
- (2) (1)の根拠としたのは、この文章のどの部分ですか？

移植医療がほかの医療と大きく違う点は、臓器を提供する第三者（ドナー）が必要であることです。…臓器提供の大原則は、「善意・無償」であることです。移植用臓器が「ギフト・オブ・ライフ」と言われることはその本質をよく表しています。

…死後の臓器提供の究極の意味は何でしょうか？それは、「絶望の中の希望」になることだと思います。この世からその人の存在がなくなるといふ死から、臓器だけがこの世に、別の人のからだの中に残り、その人に新しい生を与える。そのことが、最愛の身内を亡くすという最大の悲しみの中にある家族の決断で行われる。そして、臓器移植を受ける人が臓器を受け取って、その思いが完結する。

あるドナーファミリーの言葉です。「息子を亡くすという絶望の中で、臓器移植で命をつなぐという希望を見出せた。臓器をもらってくれた人に『ありがとう』と伝えたい。」

ドナー家族が全員このように思うわけではありませんが、「絶望の中の希望」という言葉が臓器提供の究極の意味を示しているように思います。

10代のお嬢さんの死に際し、臓器提供を選択したご両親はおっしゃいました。「最初は娘の一部だけでもこの世に残したい思いで臓器提供をしたけれども、結果として、病気で苦しむ人が救われたのであれば、それは良かったと思います。娘は、社会で何もできずに若くして旅立った。だから、最後に誰かの役に立った、命を救ったのであれば、そんな大きな立派なことをした娘を褒めてやりたい」

…ドナーの人生は死で終わる。臓器の提供を受け、レシピエント（移植を受ける患者。作成者注）の新たな人生が始まる。終わりとなり始まり、が臓器提供・移植でつながる。

…臓器移植は単に「臓器をあげる」「臓器をもらう」だけではなく、死とは、生とは、という深遠な問題に思いをはせて、行われるべき医療であると思います。

〈専門医とつくる腎移植者のための医療情報サイト MediPress 朝居朋子さんコラム 臓器移植の現場から 第4回「ドナーのご家族の思い～その奥にあるものは～」より〉

資料C 次の文章を読み、以下のことについて他の人に説明できるようにしましょう。

- (1) 登場する2人の学者は、脳死・臓器移植についてそれぞれどのように考えていると思いますか？
- (2) (1)の根拠としたのは、この文章のどの部分ですか？

「脳死者は生きていて考えている」。小松美彦・武蔵野大教授（62）は断言する。脳死と判定された後も出産した報告があり、脳死判定後20年以上にわたる長期脳死者もいたからという。

確かに、脳が機能不全になれば意識が消失するという「証明」はない。だが医学的な定義の上では回復を見込めず、死に至るのが確実な病態だ。だからこそ、臓器移植というほかの命を助ける道を選ぶ人もいる。

だが小松教授は「脳死者から臓器を移植しようとする考えは、体の弱った人を死の側にせき立てる優生思想と言える。もし本当に臓器移植で助かるなら、健常者が提供するべきだ」と話す。さらに「脳死のほかにも尊厳死などにおいて、生きていて人を死の側に追いやる線引きが進んでいる」と指摘。目の前の患者の命を救いたいという医師の気持ちは理解できるが、臓器移植ではなく代替医療の研究に注力すべきという。

移植に関わる医師の中にも、iPS細胞（人工多能性幹細胞）などで臓器を作るなら脳死下で移植する必要はないという意見がある。しかし現状では、臓器を作製する技術の確立のめどは立っておらず、移植でしか助からない命がある。

移植を受けた患者への思いを小松教授に尋ねると、少し間を置いて返事があった。「移植を受けた患者さんと話したことがある。移植を受けた人には一日でも長く生きてほしいと思っている」。だが小松教授自身は、臓器移植が必要な病状になっても移植を受けるつもりはないという。

哲学者の森岡正博・早稲田大教授（59）は、移植には本人の意思表示が必須だとした1997年の旧臓器移植法を支持している。現行法では、本人の意思が確認できなくても、家族の意思で移植に使うことができる点を問題視する。「家族といえども、他者の体を自由にする権利はないはず」と指摘する。

森岡教授によれば臓器移植とは「欲望の医療」という。近い人はずっといたい、長生きしたい、子どもを育てたい。「善悪はおいて、こうした欲望をかなえるために臓器移植はある」とみる。だからこそ、本人の意思が確認できない中で脳死者の身体を利用することには反対という。

「命のリレー」など臓器移植は素晴らしいというストーリーだけがマスコミで流通しすぎている点にも注意を促す。「批判的に考える必要性が忘れられてはならない」

また脳死の身体とiPS細胞について考えることは、人間の尊厳をいかに保つかという問題につながるという。iPS細胞は、一人の人間に成長する受精卵に近い性質を持つ。さらに「脳死の子どもは身長は伸び、体重は増え、手足は動く」と指摘した上で、人の組織を利用する医療について「人体組織の資源化は、人間の尊厳を脅かすのではないかと危惧する。」

「2017年12月25日京都新聞掲載の記事より抜粋」

(2) ワークシート

脳死と臓器移植について考える

年 組 番 氏名

1 グループ活動1・2：資料のまとめ

[資料A]の課題・まとめ

[資料B]の課題・まとめ

[資料C]の課題・まとめ

2 グループ活動3：「話し合いの視点・論点」から一つテーマを選択して、グループで話し合い、意見をまとめましょう。※時間に余裕があれば、テーマを追加して話し合ってみましょう。

「話し合いの視点・論点」

 脳死は人の死か？（脳死した人を刺したら殺人罪？心臓死が人の死だったら、心臓移植したドナーは生きています？）

 脳死・臓器移植のメリット・デメリットは？

 脳死状態の患者の家族、ドナーを待つ患者やその家族、それぞれの思いは？

 あなたが当事者だったら？

3 全体発表：メモを取りながら発表を聴きましょう。

4 個人活動：今回の学習を振り返り、脳死や臓器移植に関する考え方を通して、生命について考えたこと、感じたことを書きましょう。

V 出典・参考資料

○公益社団法人日本臓器移植ネットワーク ホームページ

○専門医とつくる腎移植者のための医療情報サイト MediPress

朝居朋子さんコラム 臓器移植の現場から 第4回「ドナーのご家族の思い～その奥にあるものは～」

○「いのちとの伴走（i P S細胞誕生10年）」（2017年12月掲載）『京都新聞』